

卑屈だった日本語観

敗戦直後、国語審議会の委員たちが、「敗戦の原因は、わが国が“漢字かな混じり文”という複雑で不合理な表記法を使っていたことにある」と言って、漢字の使用を制限し、ローマ字教育をすすめました。

この考え方は、今では多少反省されてきていますが、それでもまだ「日本語や漢字かな混じり文は劣ったもの」という考え方の抜け切らない人が多いようです。うぬぼれるのはよくありませんが、卑屈になるのも困りものです。うぬぼれは、人から努力する気持を失わせ、卑屈は、人に努力する気持を起こさせません。どちらも発展の大敵です。

ところで、今、道路表示に用いる文字としては、漢字が用いられています。たとえば“徐行”という字を、よく路上で見かけますが、一目見た瞬間に理解することができます。この“瞬間に読める”ということが、漢字のすぐれた効用なのです。

この特長は、新聞、雑誌、書籍などを読む場合に、大変な偉力を発揮します。かなやローマ字で書かれたものを読む場合の数分の一の

時間で、読み取ることができるのです。時間的に何と経済的なことでしょう。

だから、私たちはひと口に「八時間、書物を読んだ」と言っても、それがかなばかりで書かれている書物か、漢字の多い書物かによって、その書物から得られた知識の量が大変に違う、ということに注目する必要があります。

しかも、それが毎日くり返されるとしたら大変です。長い間には、両者の間に取り返しのつかない大変な差ができてしまうことは、想像にかたくありません。「わが国が、この百年間に、世界に例を見ないすばらしい発展を二度も遂げている理由は漢字かな混じり文にある」と私は考えていますが、その理由は、これでおわかりいただけるかと思えます。

今まで、文字の学習というと、読み書き並行学習が当然のことと考えられていて、漢字が読めても、書けなければ全く価値がない、というように見られて来ました。これに対して、私は、この十数年間、読み書き分離“読み先習”を唱えて来ました。

その理由の第一は、読みと書きとの実用的な価値の違いにあります。私たちは、漢字が読めなくては、現在の世の中では全く知的環境から遠ざけられてしまい、この日進月歩の世界に生き抜いていくことができなくなるでしょう。しかし、漢字が書けなくても、読めさえするならば、書けないために受ける障害は、読めない場合と違って軽いものです。

毎日の生活を考えてみて下さい。朝起きてから夜寝るまで、私たちはひっきりなしに文字を読むことを余儀なくされますが、字を書く必要はほとんどありません。書く量は、読む量の十分の一、二十分の一にも達しないでしょう。

まれに、書くことを仕事にしている人がありますが、その人でも、読むものは、政治、経済、文化、芸能、スポーツなど、あらゆる面の文字を読むのに反して、書くものは、その一部に限られているに違いありません。とにかく、読みと書きとは、その範囲にせよ、その分量にせよ、大変な違いがあるのです。

このような事実を全く無視して、読める漢字を全部書けるように要求

する、今の教育は全く非現実的な教育である、と非難されても弁解の余地はないでしょう。

社会の要求に応じた教育を

もちろん、私は、書く教育を全く無意味であると言っているわけではなく、また、書く教育を否定するものではありません。一字でも多く書ける方が、書けないよりは良いに決まっています。

しかし、読みと書きとは、社会における必要度が非常に違っていて、そのため、読みの能力と書きの能力とが違ってくるのは当然のことです。従って、読める漢字は皆書けるようにしなければならぬ、という考え方は元来無理な考え方と言わなければなりません。私たちの周囲には、まだまだ反省すべき問題がたくさんあるのです。心の目を大きく開いて、見直そうではありませんか。